

K O Σ M O Σ

Vol. 11, No. 4 (No.36)1977. 4. 26

大学創立90周年を迎えて

学 長 磯 村 英 一

大学の生命は、そこにどのような文化があり学問があるかである。その点で国公立大学には、そのような生命はない。しかし、私立大学には、創立者の意志がある。幸いわが東洋大学の創立者井上円了先生は世に聞えた哲学者であり、その業績は今日でも忘れられていない。

しかしこれまで大学では、その創立者の文化的遺産について、必ずしも十分な関心をもってきたとはいえない。たまたま学祖の所蔵していた2万数千にのぼる所蔵文献が、ようやく東京都から返還された。これは、東洋大学90年の齢いを祝う今年にとっては、又とない幸せである。

そこで、たまたま井上円了記念学術振興基金の制度が発足したので、その記念事業の第一歩として、その基金によって、現在放置されている文献を整理し、とくに、学祖自身が執筆した、多数の著書の分類や解説を実施することを提案した。

幸い、委員会の同意を得たので、図書館長を中心に、それがどのような組織によって運営されるかについて、研究のうえ、改めて提案されることになった。私は、学祖の業績を解明することによって、それが新しく科学の光を与えられるだけでなく、今日からいえば、極めて広い視野に立って研究の業績を残し、あわせて大学の基礎を築いた背景が今こそ明確になる。それはとりもなおさず、東洋大学に学問的な支柱を建てることにもなる。

私の提案は、それだけではない。大学には、学祖に匹敵する業績をもつ幾多の哲学がみられる。それが、図書館というシステムのなかで、今回、学祖の業績が整理されると同じような考えで、つぎつぎに、解明されることを期待したい。それこそが“井上基金”の本旨に添うものである。

巻頭言	1
特集 私のすすめる 一冊の本	2
工学部近況	5
利用の楽 優秀作に 本学に学んだ人々⑦	6
参考図書解題	8
投書箱から	8
日誌(52年1~4)	10

特集 私のすすめる一冊の本

今年も新学期が始まり、研究、サークル活動等々希望に満ちた日々を送っていることと思います。さて図書館では今回図書選択委員の諸先生方にお願ひし、「私のすすめる一冊の本」と題する特集をいたしました。学生の皆さんにとって有益な指針となることと思います。

(注：掲載は執筆者のアルファベット順・文末の記号は請求記号)

R. P. Wayne 著
“Photochemistry”
Butterworths & Co Ltd

日野原 忠 男
(工学部教養課程助教授)

最近光化学と我々の生活とのかかわり合いが、いろいろな面でクローズアップされて来ている。その一つが光化学スモッグで代表される大気汚染の問題である。光化学は一般の人々の知らない面でもいろいろなかたちで我々の生活とのかかわり合いを持っている。地球はそのエネルギー源の99%を太陽からの放射にあおいでいる。このうち地表にとどくのは波長3000Å以上の可視光が主体であるが、このエネルギーの捕獲に主役を演じているのが緑色植物である。この植物を食料として活動源にしているのが人間を含む動物である。また波長が3000Åより短い高エネルギー放射線が地表までとどかない事実も我々地球型生物にとって大事なことである。洋書(和書には見当たらない)ではあるが、このような問題を扱った数少ない書物の一つとしておすすめしたい。この本の第八章には大気圏の光化学(電離層、オゾン層)、大気汚染、光合成、視覚、光発色や写真などの解説がある。

(発注中)

鈴木忠義編
「現代観光論」
有斐閣双書

井上 博 文
(短期大学ホテル)
観光学科助教授

現代社会における観光の意義は、かつての単なる物見遊山であり、不要不急なものという認識から、国民の精神衛生や健全な身体の保持のためにも、世界平和のためにも、共に必要不可欠な生活要件であるとされて来ている。

観光は様々な要素を含む複雑な現象であり、そ

の研究には自然科学、人文科学、社会科学のほとんど全ての分野からのアプローチがあり、基本的には学際的な研究を必要とする対象なのである。その観光に関する研究は、他の学問と比較してまだ短く1920年代からヨーロッパを中心に行なわれ、大戦後に急速に発展してきたもので、初期の研究対象は、外客の往来がもたらす経済的効果の分析と往来を促進するための方策が中心となっていたが、現在では社会的、文化的効果が重視されるようになって、観光開発、観光地計画など観光現象を積極的に発展させることにかかわる研究が大きくウエイトを占めるようになってきている。本書は、これらを踏まえて観光歴史、観光研究の成立展開、観光欲求と行動、観光資源、観光事業、観光政策と行政等々、観光に関する各論を理解しやすく解説してあり、観光学の入門書として最適な書として学生諸君に奨めたい。(発注中)

数年前のことだが「SAMOURAI——サムライ」という題名のついたフランス映画があった。アラン・ドロロンが主演だったが、なぜフランス人がこの映画にそんな題名をつけたのか、さっぱり解らないとか、いや内容にぴったりだとか、まちまちの評価があった。

吉本 隆明 著
「最後の親鸞」
春秋社 昭和51年

孝 橋 正 一
(社会学部教授)

書庫に宝はあふれている。本を読み、活用せよ、知識と人生を豊かにしなさい、そのために一冊の本を推薦してほしいという図書館の依頼に背いて、申し訳のないような気もするが、私はあまり本を読まないことを奨めたい。と言っても条件つきだ。くだらぬ本——そこからさえ良いものを

引き出すことはできるが——を買いあさって出版・商業資本の腹を肥やすよりも、最高の良書を一冊だけ熟読・思惟を重ねることの方が、はるかに生産的であり、主体性の確立に役立つように思われる。

どろどろの人間の、ぎりぎりいっぱいまで追いつめた体当りの探究で発見した真理、それが「最後の親鸞」であった。透徹した孤独、それがサムライであり、そこに主体性が確立される。

(発注中)

エールリッヒ著 川島武宜、三藤正訳 「 権能力論 」 岩波書店 1975年改訳 三野陽治 (法学部教授)
--

現行民法の基本構造は人格の自由を前提としており、すべての人間は権利義務の主体となり、その意思

により契約を締結し社会との法律関係を形成するのである。これが権能力と行為能力の観念であり、現代民法ではすべての人間は平等に権能力を有するのが原則である。そしてこの原則は社会の歴史的発展とともに認められたものである。民法を学ぶ学生が最初に学習するのは民法総則である。この中で権利の主体、客体、法律行為等を現行法にそくして学ぶことは勿論大切であるが、これとともに権能力の社会的意義と歴史的発展を社会の発展にそくして考察してみることも必要である。このために「権能力論」を読むことをすすめたいと思う。本書には社会の歴史的発展とともに法的観念としての権能力の観念が次第に個人に認められて来た過程が明瞭に述べられている。また諸国の近代民法の成立過程やその内容も詳細に述べられているので民法の全領域を勉強することにも参考になると思う。(324.11:EE)

ヒルファディング著 岡崎次郎訳 「 金融資本論 」上中下 岩波文庫 岡本磐男 (経済学部教授)

社会科学とくに経済学を志す学生に一冊の本を推薦せよといわれると若干の躊躇を感じざるをえない

が、私はさしあたり本書の一読をすすめたい。その一つの理由は私の学生時代のゼミで精読したのが本書であったという思い出深い書物だからでも

あるが、そればかりではない。本書は、決してその書名から受ける印象のように銀行資本自身を論じたものではなく、国家独占資本主義ともいわれる現代経済の機構や運動を把握するさいの基礎となる独占前段階の広範な諸理論が追究されている古典的名著だからである。一般に経済学の古典として定評のある書物の中で気軽に読めるものは殆んど皆無とってよいが、本書もその例外ではなくかなり難解である。さらに著者ヒルファディングは後年には政界でドイツ社会民主党の領袖として活躍し蔵相の地位についた俊英であるが、本書は彼の若き日の著作でありきわめて荒削りの論理が目につく。したがってわが国では、多くの論者によって方法上の難点や論理的な誤謬が指摘されている。だが解説書も多いことであるから、あえて精読の試みに挑戦する意欲をもっていただきたいものである。(338:HR-2:3)

東山魁夷著 「 唐招提寺への道 」 新潮選書 昭和50年 大鹿実秋 (文学部教授)
--

東山魁夷(ひがしやまかいい)と私との出会いは新しい。絵画に弱いからである。この書がその出会いで

ある。著者は『唐招提寺への道』は私にとって長い道であり、険しい道である。この書は、御影堂障壁画制作の記録としてよりも、その長い道を独り歩み続ける一画家の単調なモノローグと言わべきである』とあとがきで語る。唐招提寺への道は、まさに求道者の道であり、涅槃への道であり人間完成への道である。人間なら誰しも共感できる道である。その旅人の語る奈良を中心とする日本全国の旅情と風景描写は巧まらず自然であり、語る人もなければ語られる風物もなく渾然一体である。自然が私たちに語りかける、そういった時間空間を超えた永劫に連なる声である。重厚荘重につに格調の高い文章である。足は大地に根ざして心は高く虚空に遊ぶ。洗心の書として新しい人生の旅人にこの書を推すものである。全237頁のどの頁も旅人の旅塵を洗いおとさずにはいないであろう。(発注中)

山崎 国紀 著
「森 鷗 外」
講談社現代新書 昭和51年

大島 藤 太 郎
(経営学部教授)

鷗外と漱石は近代日本文学史上の二大巨星である。しかし両者の人生観は全く異なり、ゆがんだ日本の近代

社会における知識人の生き方を示している。漱石はゆううつなロンドン生活を送って帰り、東大教授を目前にして「新聞屋が商売ならば大学屋も商売である」(入社の際)と大学教授の権威主義を罵倒して朝日新聞社へ入り、天降りの博士号を拒絶し、一介の文士として生涯を終った。これに対して鷗外はドイツの生活と文化をエンジョイして帰り、軍医として出世街道を歩み、医・文学博士となり、元老山県有朋に近づき、軍医総監で陸軍を終り、宮内省図書頭・皇室博物館長で人生の幕をとじた。その間、ドイツ時代の恋人エリスが彼を追って日本へきたが追い返し、第1師団(東京)から第12師団(小倉)への左遷、キタ・セクスアリスの発禁、「斗う家長」として登志子夫人との離婚、「半日」にみられる年若い美人のしげ子夫人と母峰子との確執等複雑な人生行路を辿った。鷗外の人生における最大の矛盾は官僚=栄達主義と文学者=自由人の対立であり、遺言として「死ハ一切ヲ打チ切リ重大事件ナリ奈何ナル官権(憲)威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ」(現物は鷗外図書館にあり、東洋大学より徒歩10分)言や凄絶、鷗外なりの矛盾の解決であった。(発注中)

武谷 三男 編
「安全性の考え方」
岩波新書 昭和42年

杉 浦 公 昭
(工学部講師)

先日、福島市の消費者団体連絡協議会から合成洗剤の危険性と食品公害についての講演を依頼され、その

演題が「日常生活の安全性について」となっていました。そこで以前古本屋で買い本棚に積読?してあったこの本を読んで感動しましたので、一読されるようおすすめする次第です。

国民の生命と健康を守るべき厚生省は、その危険性が“疑われるものの使用、製造を中止すべ

き”なのに“まだわからないから”とって中止に踏み切らず、大企業の利益擁護の立場をとり続けていること。このような時代に「国民が身の安全を守るためには、国民自らが、そのための努力を続け、市民運動として闘いとらねばならない」ことなどが指摘されています。「ソ連じゃあ、小児マヒは、ボンボンを飲めばなおるといっじゃありませんか。先生何とかして手に入れてくれませんか。」このたった一人の子を思う母親の訴えが「自分の子どもを、というだけでなく、すべての子どもを、と思う、普遍的な母親の愛情をよびおこし」全国の母親の共感を呼び、頑迷な政府を動かす、ついにはわが国から小児マヒをほとんど追放するまでの成果をあげたと感動的な教訓を述べています。(498.04:TM)

藤永 茂著
「アメリカ・インディアン悲史」
朝日選書21 朝日新聞社 昭和49年

暉 峻 凌 三
(文学部教授)

「よいグーク(ベトナム人)は死んだ奴だけ」ということばは、「よいインディアンは死んだ奴だけ」につながる。1968年南ベトナムのソンミ虐殺事件はアメリカ史の孤立した出来事ではなかった。

白人がやって来るまえ悠遠の昔からアメリカ大陸に住んでいたインディアンは、17世紀以降19世紀の半ごろまで文明と進歩の名のもとに、そして神の名のもとにさえ、虫けらのように抹殺され追い立てられて来た。本書はインディアンのこの悲史を、たんに原住民と「優越」侵入民族との対決としてではなく、二つの異質の幸福論(自然征服に生きる生き方と、自然の一部として生きる生き方)の激突とかがえる。

量子化学専攻の著者はこの本を、60年代の大学問題へのひとつの答案として書いた。いろんなことに想像力をはたらかせながら読むべきであろう。(316.853:FS)

* * *

紙面の都合上、次号に石田稷二先生、高橋統一先生、山岡景行先生の分を掲載させていただきます。

工学部分館近況

1. 書庫拡張工事、図書移転作業完了。

前号にてお知らせした書庫拡張工事が2月28日完了し、3月3日より19日まで6名の学生アルバイトを頼んで図書の移転作業を行った。

永い間各研究室に預けておいたものを引取り、今後大量増加の予定される部分には、たっぷり余裕を持たせて排列した。

雑誌のバックナンバーは全部一ヶ所に揃えて使い易くなったし、これまで2階閲覧室にあった Chemical Abstracts, Gmelins Handbuch der Anorganischen Chemie, Beilsteine の Handbuch der Organischen Chemie, Landolt-Börnstein, Ullmans Encyklopädie. を書庫に降して、キャレルでの検索やコピーに便利ようにした。又、情報センターの文献速報もキチンと整理されて書架に収まり、これまでのように山の中か

ら探し出すことはなくなった。電動式移動書架は館員にとっては大変具合がよいが、学生教職員は慣れるまでに少し時間がかかるだろう。

2階の空いた部分には、昨春新設された情報工学関係の図書を置く事になった。

2. ロビーに自動式複写機を設置

数年前より利用者から希望があつたユービックスをロビーに設置した。

ユービックス1500は写真が極めて鮮明にコピーされるので、工学部の利用者には大変好評で、3ヶ月のテスト中故障は皆無であった。

今後、複写室では午前9時10分より午後3時まで複写業務を行う（但し昼食時は1時間の休憩、土曜日は12時30分まで）。又、学生のコピーは第2原図用紙だけを複写室で受付ける。

ユービックスは1枚20円、10円硬貨、100円硬貨を御用意下さい。

当館・利用のしおり、優秀作に選ばれる

去る1月26・27日の両日におわたって、専門図書館協議会主催の図書館作成資料ならびに図書館用品展示会が、東京商工会議所・商工図書館において開催された。

参加機関は60機関、出品総数は210点に達し、当館から出品した利用のしおりは、4部門中、第1部門の図書館案内・利用の手引きにおいて、優秀作品に選ばれた。

受賞の大きな理由としては、分りやすいことと創造性に富むということで、この部門に寄せられた39点の中でも特別の評価を受けた。

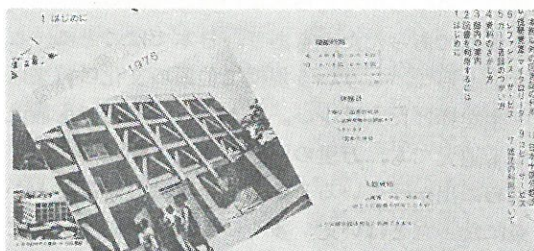
審査は、玉置正美氏（亜細亜大・経済学部教授）、前園主計氏（青山学院女子短大・助教授）、河島正光氏（慶応義塾大・図書館情報学科講師）の3名により、分りやすさを中心に、創造性、情報量、迅速性、美観、継続性などの点を各部門ごとに吟味して、厳密かつ公平に行なわれた。

展示場には、図書館案内・利用の手引き、資料速報・新着速報、抄録誌・雑誌記事索引、蔵書目録・主題別目録の各部門ごとに出品作が並べら

れ、優秀作ならびに秀作には色紙が貼られ、一般参観者の目にとまるよう工夫されていた。

表彰式は、会期中2日目の午後1時から、展示会場隣の講堂において行なわれ、当館からは後藤館長と館員1名が出席し、盾と副賞とを授与された。

なお、図書館利用のしおりは、現図書館落成後の昭和47年（岡田温氏館長当時）に、館員全員の総意と協力を得て作成されたものであり、それ以来幾多の改定を経て今日に到った。次年度からは白山本館と朝霞分館用の平易なしおりとして、活用されることとなろう。



河口 慧海—その人と業績

文学部教授 金 岡 秀 友



玄奘三蔵（600～664）について、すぐれた伝記を完成した慶応大学の前嶋信次教授は、彼が何故に優れているかについて次のようにいっておられる。ナポレオンのように多くの

国々を征服してそこに一つの政治理念や文化をゆきわたらせることも、もちろん偉大な業績であり、彼は偉人といわれてよいであろう。しかし、玄奘のように60年の生涯を三分して、前半は仏教の勉強と渡印の準備に充て、中間はインドへの旅行・留学・研究に費し、後半は、インドからもち帰った龐大な經典の翻訳と研究に充てる。このような地味な著実な目的に向ってわきめもふらずに一生を捧げ、しかも否定することのできぬ業績を今日に伝えた人は、やはり、疑がうべからざる偉人であると（岩波新書『玄奘三蔵』）。

玄奘の業績は、インド文化を中国にもたらすという世界史的規模のものであり、今日でも、ある大国とある大国との文化的接触の上で、一個人がこれだけ大きな業績を挙げた例はみられないのではないかと思われる。何しろ、16年間のインド旅行から彼が持ち返った梵本が520包み、657部、晩年20年で訳しおえたものだけでも75部、1335巻だったのであるから、「空前絶後」ということばは彼のためにしか考えられないほどである。

島国であったためもあり、日本ではことに、こういう形で、こういう規模で他国の文化の将来に一生を捧げた人は少い。もちろん、空海でも最澄でも道元でも、万里の波濤を超えて中国へ仏教を求めに出かけているし、明治以後は、「洋行」が楽になったとはいえ、多くの人が西欧に文化を求めて旅立っている。

しかし、今日といえども入国にさまざまな困難の伴うチベットに前後三回も入り、しかもただ入ったのみならず、その地で本格的な仏教学の眼をもって經典を蒐集・将来し、その幾つかの部分で翻訳までした河口慧海（1866～1945）ほどの人物となると、絶後ではないまでも空前である。その意味で、河口慧海は日本の玄奘といってよいと思う。

この偉人が本学の卒業生であることを知ったならば、新入・在学・終業の諸兄の均しくよろこびを感じるところであろう。

慧海の生れた1866年は、日本元号での慶応二年、従ってまだ今日のようにすべての制度のととのっておらぬ時期のこととて、本学ももちろん今日のようなものではなく、哲学館と称していた時期である。慧海は大阪の堺市で生れ、寺小屋から小学館、小学校を途中で退学し、家業の樽屋などを手伝ったり、塾に通ったり、小学校の代用教員となったりし、明治21年（1888）上京して哲学館に入学したのであった。これだけでも充分わかるように典型的な「苦学」であり、この間にひどい脚氣に罹ったりしたのもそのためだったようである。しかし烈々たる求道心はすでに内から発して、15才のとき『釈迦伝』を読んで発奮し、禁酒・禁肉食・不淫の三つを誓い一生の願としている。そして哲学館を明治24年（1891）終学しているが、得度をしたのはその前年のことであった。つまり、河口慧海はその青年期に、自分の信念において生涯の進路を仏教に選び、大学においてその信念に客観性をもたせるための学問を窮めたのであった。

彼の資質はもちろん、こういう進路を実践するに足る力をもっており、本学もそれに応える力をもっていたのであろう。これは私のような無力のものにとっては、一つは自分の不甲斐なきをよびおこす種子でもあるが、また反面、自分をふるいおこす大きな刺激でもある。本学に学ぶ諸君も同

様な感想をもたれるのではなからうか。

進路を決定することも大切であるが、それを継続することは、まことに前嶋教授のいわれるようによく偉人のみの能うところという感じがする。一生猿を描いた森狙仙とか、一生鶏を描いた伊藤若沖とかいう人々の話を讀むと、ずいぶん倦きたことも、疑いの生じたこともあったであらうにと三嘆する。

慧海の一生もまさにそれであった。彼は黄檗宗という禅宗の一派の僧となったのであるが、行と学が進むにつれて、仏教の本源を求めようとする気持ちが増す強くなり、早い時期からインドの古典語であるパーリ語や梵語(サンスクリット)の勉強をはじめている。彼のインド行き、ついでチベット行きは、止むに止まれぬ「仏教の本源」を求めての旅なのであって、このごろはやりの、どこでもいから「海外旅行」してみたいというようなものとは根本から違っていたのであった。かくて明治30年(1897)から大正3年(1914)にかけ、前後三回インド、チベットを往復滞留し、仏教と、それに関連する諸言語の研究に専念した。

今日、東京大学や東洋文庫に収められている膨大な量の梵語チベット語の文献は、この間慧海が苦心蒐集した成果に外ならない。

さらに彼の成果として見のがすことのできないものは、本邦最初というべき『チベット語文法』と『チベット旅行記』であり、二つは時代を超えて、慧海の学問と記録が、いかにまじめで信頼に堪えるものであるかを物語っている。旅行記は英訳され、多くのヨーロッパ人がそれを片手にチベットに入り、改めてその記事の正確なことにびっくりしたのであった。

本学が彼を生んだとまではいえないまでも、育てたことは確かであることはわれわれにとっての大きな喜びであらう。

(写真:白水社『西域探検紀行全集』7巻より)



本館所蔵の河口慧海著書・訳述・論集

[著書・訳述]

『西藏旅行記』博文館 明治37年

(292.29:KE:3)

『西藏傳印度佛教歴史』貝葉書院 大正11年
(180.225:KE)

『在家佛教』世界文庫 大正15年(188:KE)

『ヒマラヤ山の光』日本蔵梵学会 昭和6年
(129.74:KE)

『梵・藏・和・英合璧浄土三部経』蔵和对訳
河口慧海 大東出版社 昭和6年
(183.52:J)

『蔵文和訳大日経』西藏経典出版所 昭和9年
(183.7:D)

『正眞佛教』古今書院 昭和11年
(180.1:KE)

『西藏旅行記』山喜房佛書林 昭和16年
(292.29:KE)

『チベット旅行記』白水社 昭和41~「西域
探検紀行全集第7巻」(292.28:S:1-7)

『第二回チベット旅行記』河口慧海の会 昭和
41年 (292.29:KE・2)

『佛教和讃』佛教宣揚会 大正10年(整理中)

『印度密教時代区劃の研究』大正10年
(整理中)

[論集]

「河口慧海」藤吉慈海 『20世紀を動かした人々
・14巻』講談社 昭和38年
(280.8:N:10-14)

「河口慧海」常光浩然 『明治の仏教者・下』
春秋社 昭和44年 (180.21:TK:1-2)

「ヒマラヤ初越えの日本僧」青江舜二郎 『文芸
春秋』昭和35年 第38巻12号(051.3:B)

「河口慧海の生涯と思想」伊藤 剛
『中央公論』昭和44年 第84巻12号,第85
巻3号 (051.3:C)

「西域探検の先駆者 河口慧海」深田久弥
『旅』昭和45年 第44巻6号(未分類)

このシリーズに掲載された人々

- ① 坂口安吾 9巻 1号 (1974年)
- ② 葛西善蔵 9巻 2号 (1974年)
- ③ 山本和夫 9巻 3号 (1975年)
- ④ 赤松月船 10巻 1号 (1975年)
- ⑤ 勝 承夫 10巻 2号 (1975年)
- ⑥ 前川佐美夫 10巻 4号 (1976年)

一本 館

① **Social sciences citation index. 年刊 (1970 年版より所蔵)** (305.039 : S)

SSCIと略称される社会科学分野の大規模な雑誌論文索引。収録対象は関連分野も含めて3千タイトル以上にのぼる。構成は4種類の索引から成る。1 : Citation index は引用された人から、2 : Source index は引用した人から、3 : Corporate address index は団体名からそこに属する人へ、4 : Permuterm Subject index は主題から、各々引くことができる。

この論文がどこかに引用されているか？この主題について論評があるか？この方法は全くのオリジナルか？この分野を誰かほかの人が研究しているか？など、利用方法は広い。

② **精神医学辞典**, 加藤正明等編(493.7 : S—4) 4年近い年月をかけて132人の精神科医が執筆。精神病理学, 精神療法, 精神分析, 社会精神医学の領域に重点があるが, 隣接する科学も心理学, 社会学, 社会福祉, 法学, 文化人類学と多様である。

五十音順に事項を配列しているが, 日本語の見だしのあとに英・独・仏と更に必要に応じてラテン語が付してある。説明は比較的簡潔だが, 巻末に文献一覧として60頁にわたるリストがあり, 本文から参照がついているのも親切。索引は, 和文と欧文の事項索引と人名索引。

③ **厚生白書 厚生省編 年刊 (昭和31年より所蔵)** (498.1 : K)

厚生行政の1年間の歩みをたどる白書。各年度とも総論と各論とに分れていて, 総論では毎年特定テーマを設けている。ちなみに49年度は“人口変動と社会保障”50年度は“これからの社会保障”51年度は“婦人と社会保障”。各論の中は, 医療制度, 医薬品, 生活環境, 公衆衛生, 年金, 社会福祉, 国際協力と試験研究及び情報システムの進展などについて報告される。それぞれに豊富な図表を伴っている。

NCハンドブック NCハンドブック編集委員会編 (日刊工業新聞社) (532 : N—2)

NC技術は, 航空機工業にとってなくてはならない存在であるが, 最近では一般機械工業にも導入が試みられるようになった。

このNCハンドブックは, NCのプログラミング, NC装置, NC機械(第1章~第3章)およびNC機械の機能, 要素(第4章, 第5章)についての一般論や各論にはじまり, 第6章のシステムに終わる内容の豊かなものである。システム編では, 70年代から80年代にかけての, 機械工場の無人化へのアプローチにおいて, 知っておかなくてはならないDNCやCNC, 適応制御を, 実例を示してその考え方を述べている。さらに無人化システムを実現するうえで重要な周辺技術であり, 生産技術上の問題であるツーリングシステム, データバンク, グループテクノロジー, システム評価について解説をしている。

—お知らせ—

図書の一般館外貸出冊数の変更 : 2冊一週間に3冊一週間に。

投書箱から

卒業=退学に際して苦言少々

1) 一年で一番長い春休みこそ僕ら学生にとって読書しやすい季節であるのに, 図書館では図書を貸出してくれない。学外の公共図書館は受験生で満員。大学に来るのは授業を受ける為でなく図書館利用の為だと云う人が多勢いることも理解して欲しい。

[K O Σ] MO Σ] Vol. 11 No. 3の8頁に, 春休み中は, 開架図書の点検をするとあり, その苦勞の程は良くわかります。かと云って閉館の理由とはならないでしょう。と云うのも, 貸出カードというものがあるのだから。

2) 何故, 試験期間中, 図書の貸出しを全面的に中止するのですか。受験する学生が平等に本を使えるため?しかし, それなら, 参考図書, 指

定図書、開架図書だけで充分ではないでしょうか。特にそれらの本を閉架にしないのは、それらの本が講義や一般教養に役立つために選ばれたのではないのですか。学年末試験を受ける学生が、例えば僕など2年がかりでやっと読んでいるラテン語の本や独仏語の原書をちょっと参考に読むだろうか。

(大学院文学研究科博士課程3年 S生)

係から

1) について

今春は学内事情により図書館の業務計画も大幅変更を余儀なくされました。近年照合業務は3月一杯かけて行なっていましたが、今年は3月7日より3月23日までが学部第一部1, 2, 3年生の学年末試験に当たったため、試験期間中に照合業務を行ない図書館の利用を中止することは適切でないとの判断から、急遽2月16日より3月5日までの間に照合業務期間を変更して、閲覧係全員で実施しました。その関係で上記の期間、図書館の利用を中止いたしました。

図書館に対する要望の年々の多様化に応じ、利用者の増加に対応して、より質の高いサービスを行なうためにはどうしても照合は内部条件整備の一環として必要なものです。照合業務は年一回利用者の少ない時期を選んで実施するものですが、閲覧利用統計などを参考にしながら検討した結果、毎年3月に実施した方が利用者にとって、もっとも実害が少ないのではないかと考えられ、この月に実施しています。作業方法は書架カード目録と図書を1冊1冊照合し、その所蔵状況を明らかにし、破損図書の選別なども同時に行なうものです。即ち、図書の存否をはっきりさせておくことにあります。これが利用者を失望させないためにもなるからです。

あなたは「図書の照合なら貸出カードがあればできるのではないのか」と言われますが、それも一理あるかもしれません。しかし、完全とまではいかなくても係が十分満足のいく照合をするにはやはり貸出している図書は返却してもらい、図書を静止状態にして照合した方が図書の確実な把握にはより有効なのです。

しかしながら今後照合期間中の図書の利用についても、照合から除かれたものではできるだけ早く利用できるようにします。その利用の具体的方法等については目下検討中です。

2) について

学習図書館の機能を果たす図書館として開架書庫を設け、そこに、指定図書、一般教養書、概論書などと、学部学生、短大生のカリキュラムを反映した図書を設置してあります。しかし、学部学生、短大生が試験期間中に開架図書、参考図書だけを利用するという確証はなく、開架図書で不十分なところは閉架図書で補なっています。学部の3, 4年生になるとむしろ閉架図書を多く利用しているのも事実です。

あなたの言い分を認めて、欧文図書は試験期間中利用が少ないからと言って館外貸出をした場合、他の利用者からも開架書庫、閉架書庫の和漢書にも同様な図書があるからと言われて、貸出を認めざるを得なくなり、ついには、あれもこれもと言って際限がなくなり、利用者にとってかえって不平等になります。

また、開架図書は学習用であり、閉架図書は研究用とかに区別することは現在の段階ではなかなか困難です。以上のような理由から試験期間中は館外貸出を中止にしています。

ただし、今後の図書館の基本的な方針として、特に利用度の高い図書は積極的に複本を揃えたり、教員が教育上の必要から学生が必読すべきとした図書や講義に関連した参考文献を集め、開架書庫が学習用図書館として十分機能を果たせるようにすると共に、参考室、開架書庫に多様な要求に応えられるような図書を集め、きめ細かなサービスができるようにしていきたいと考えております。



日 誌 (52年1月～4月14日)

- 1月10日 分館, 自動複写機ユービックス1500を設置
- 14日 分類分科会 (於日本体育大学図書館, 日野参加)
逐次刊行物分科会 (於東京電機大学図書館, 栗沢参加)
- 17日 人事異動発令, 図書課五十嵐係長, 開発調整部二課係長として転出
- 19日 ネパール, カトマンズ, トリババン大学タンデ教授見学のため来館
- 20日 工学部分館運営委員会
- 21日 研修分科会 (於大妻女子大学, 高石, 高橋参加)
- 24日 白山開館後, 学内事情のためただちに閉館
工学部分館連絡会
- 25日 学内事情のため夜間のみ開館, 29日まで
- 29日 書誌学分科会 (於本学図書館, 山内, 村田参加)
- 31日 白山連絡会
- 2月1日 国立国会図書館と大学図書館長との懇談会 (於国立国会図書館, 山内代理出席)
- 4日 分館書庫拡張のため書架組立工事開始
白山運営委員会
- 16日 白山, 開架図書, 参考図書照合業務のため閲覧業務中止, 3月5日まで
- 22日 工学部分館連絡会
- 25日 逐次刊行物分科会 (於東京経済大学図書館, 栗沢, 中川参加)
- 3月2日 工学部分館, 書架組立工事完了
- 3日 工学部分館, 新書庫へ移動開始
- 4日 私立大学図書館協会東地区部会 (於東海大学校友会館, 山内参加)
同協会東地区第3回研究部会 (於東海大学校友会館, 河田, 中川参加)
- 7日 研修分科会 (於早稲田大学大隈会館,

- 高石, 高橋参加)
- 11日 分類分科会 (於日本女子大学, 日野参加)
- 14日 工学部分館, 蔵書照合業務開始
- 16日 書誌学分科会 (於本学図書館, 山内, 村田参加)
- 18日 逐次刊行物分科会 (於共立女子大学, 栗沢, 中川参加)
- 19日 書誌学分科会 (於本学図書館, 山内, 村田参加)
- 28日 整理課鹿島係長, 図書課河田, 朝霞分館の開館準備を命ぜらる。
- 4月1日 新入館員井田, 島村 (図書課) 平出, 藤井 (朝霞分館) 配属
- 5日 朝霞分館視察, 業務打合, 後藤館長, 山内, 小島両課長出張
- 7日～14日 新入生図書館利用オリエンテーション

~~~~~

訂正 前号 (Vol. 11, No. 3) の記事を次のように訂正いたします。

| 訂 正 箇 所         | 誤      | 正      |
|-----------------|--------|--------|
| P. 1 下から1行目     | 前分館長   | 元分館長   |
| P. 3 左側下から3行目   | 352    | 2, 836 |
| "    "    2行目   | 2, 836 | 352    |
| P. 7 右側下から7行目   | 九手     | 九牛     |
| P. 10 左側上から17行目 | 撮影     | 映写     |

編 集 後 記

新年度になり大学も新入生を迎へ、新しい活力が加わりましたが、我ら編集委員も一年の任期を終へ、次号からは新編集諸氏でお届けします。

「本学に学んだ人々」は一年振りの掲載ですが、今回は河口慧海をとりあげました。ひとりの人間の、人となり、業績を評価することは困難ですが、先人の足跡を己自身に投影することも必要ではないでしょうか。(伊藤美, 黒崎, 黒澤, 森, 高橋)